

## 新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

### 『会計利益の基礎概念』

浅見裕子 著 | 中央経済社、2021、320pp.

本書は、会計利益の基礎概念に照らして、国際会計基準審議会(IASB)の「財務報告に関する概念フレームワーク」の問題点を考察するものである。書名に関わる直接的な議論は本書の第1部および第2部を構成し、そこでの議論をふまえて、IASBの概念フレームワークにおける利益概念や測定基礎の選択、質的特性やリサイクリングに関わる問題点について第3部で考察している。

具体的には、先行研究の検討から、Hicksの経済的所得に近似する会計所得は純利益(純利益自体、必ずしも経済的所得に一致するわけではない)であって包括利益ではない、と筆者は論を進めていく。それにしがえば、IASBの概念フレームワークは、経済的所得に近似する包括利益は理論的に優れた会計利益であるという誤った見解にもとづいて策定されている、と考えられる。その結果として、現行の概念フレームワークに多くの問題点が存在することを整合的に説明することができる、と筆者は提示する。さらに、概念フレームワークにおける利益概念や認識、測定の規定には矛盾点や不足点があって、機能不全に陥っていることを、会計利益の基礎概念に関する研究結果を用いて指摘している。

緻密に論をすすめるためか、各章における筆者の論述に若干重複が多いように思われ読みにくさを感じることもある。また内容は上級者向けである点を考えれば、どちらかと言えば研究者や研究者を志す学生、会計実務家が読むに値する本である。ただ、卒論作成のために概念フレームワークを学習、考察する学生諸君も多いと思われるので、その際には一読を勧めたい書物である。

評／『彦根論叢』編集委員／太田善之

### 『名画で学ぶ経済の世界史』

田中靖浩 著 | マガジンハウス、2020、272pp.

歴史に学ぶことの重要性はよく説かれる。本書は11世紀頃のイタリア以来の世界史の流れを、欧米の教会や美術館などに飾られる名画と結びつけて、それらの中に当時の社会状況、人々の苦しみや楽しみ、希望などを見出しつつ物語として綴った書物である。当然のことながら本書には名画が随所に差し込まれており、気楽に欧米の歴史に触れることができると言えよう。

評者は、西洋簿記の起源を中世のイタリアに求め、イタリアを出発点とする簿記の発展史を講義の一部で毎年のように話しているの、イタリア、フランドル・オランダ、フランス、イギリス、アメリカと辿る本書の流れは、まさしく西洋簿記の発展史の流れと一致していると感じ、それが各地の名画とも結びつくことはとても興味深い。また、一概に言えないが、この流れは世界的な覇権を握る国がこのように移り変わっていったことの証左でもあり、経済発展と名画の誕生が重なり合っている。

そして、これら名画に描かれるモチーフのひとつが、疫病の流行に伴う社会生活の変容であることは重要であろう。今まさに世界で感染が広がっているCOVID-19、いわゆる新型コロナウイルス感染症のまん延に伴いどのような芸術作品が描かれ、あるいは、作られ、それらが後世においてどのように評価されるかは、若い皆さんにこそ感じて欲しいところである。

気楽に読むことができ、旅情を誘う書物でもある。この本を読むとともに、いつかこのコロナ禍が収まったときには、世界各地の美術館などを巡って絵画鑑賞に浸っている自分を想像してみてもどうだろうか。

評／『彦根論叢』編集委員／太田善之

